

コリントⅡ 6 章 1-10 節 「今や恵みの時、今こそ救いの日」

パウロは、「今」という意味をよくわきまえていました。「今」を逃したら、もうチャンスはない。だから、神からいただいた恵みを無駄にしてはいけません。そのように、パウロは私たちをも励ましてくださっているのです。今日の箇所は 5 章 11 節から始まる、「和解させる任務」の段落の一部です。「和解させる任務」、それは神が教会に委ねてくださった務めであり、しかもその教会の務めは、「今」という時と深く結びついた任務なのです。

4 節には「その実を示しています」と書かれています。5 章 12 節の「自分を推薦する」と同じ言葉です。自分を推薦する、間違った仕方ではしゃばるようなことは、まずいだろう。けれども、だからと言って、神の協力者たる者が、自分を隠してしまったらどうしようもない。だから「わたしたちはこの奉仕の務めが非難されないように……あらゆる場合に神に仕える者としてその実を示しています。あなたがたのために、自分自身を差し出しています」。皆さんひとりひとりが、そのように自分自身を推薦する、あるいは自分自身を差し出していくことができれば、どんなにすばらしいかと思います。しかし皆さんの多くは、「いや、そんな無茶な、何がすばらしいんだか」と思うことでしょう。そこで改めて問題になることは、いったいいかなる自分を推薦するのか、ということです。パウロは、ちっとも心を開こうとしないコリントの人たちのために、どう自分を示そうとしたのでしょうか。

忍耐とか苦難とか欠乏とか、純真とか知識とか寛容とか、とにかくあらゆる面において、私はあなたがたのために、神に仕える者としての姿を差し出しています。パウロも、ほめられたり、けなされたり、その中で苦しみ抜いたのでしょう。そんなときにも、私は神に仕える者として、自分自身をあなたがたに示してきました。キリストの愛に駆り立てられた者として、あなたがたの前に立ち続けました。だから、どうか心を狭くしないで、と言うのです。さらに、8 節の後半です。パウロもしばしば、悪口を言われたのでしょう。「あいつは嘘つきだ。人を欺いている」「人に知られていないようできて、よく知られ」。誰からも知られていない、無視されているというのは、とてもつらいことです。ひとりで意地を張っている人の姿は、痛々しさしかありません。けれども「死にかかっているようで…」と発言しているのは、もはやパウロ自身ではないのです。キリストの愛がパウロを取り囲み、教会の迫害者であった男を、神の協力者として駆り立てて、そのパウロのために、主イエスが語り掛けてくださったのだと思うのです。「死にかかっているようで、見よ、あなたはこのように生きている。わたしが、あなたを生かす」。

パウロも、悲しみを知らなかった人ではありません。けれども、そのパウロを生かし抜いた神の恵みは、決して無駄にならなかったのです。だからこそ、見よ、わたしは常に喜んでいる。多くの人を富ませている。無一物のように見えるかもしれないけれども、実はすべてのものを所有しているんだ。わたしは、キリストの愛に取り囲まれているから。そのような自分を、すべての人のために差し出していく幸いな道に、パウロは立つことができました。「死にかかっているようで、見よ、このように生きている！」このわたしを見てほしい。心新たに、パウロと同じ場所に立ちたいと願います。そのような私たちの存在を通して、「今や、恵みの時、今こそ、救いの日」という神のみ声が響いていくのです。